

K E I O

SFC

R E V I E W

情報社会の「知」のフロンティア

Shonan
Fujisawa
Campus

No.9

Spring 2001

特集 AUDから環境デザインへ

Who am I ?

Dr. INNOVATOR

SFCへの一言メッセージ

KEIO SFC REVIEW 9号発刊に際して

SFC生の多くが利用する地元湘南台の皆様に、SFCに対するメッセージをお寄せ頂きました。

豚 菜

店主 小島 英泰

特に言葉にして言い立てるのではなく、調和を美德としている国ですが、今日国際社会を動かしている方法、手段は欧米流の美しい言葉を持って自己を正統化して臆面もないものです。国際社会で活躍を期待される皆様には言挙こそ重要なと思いますが、如何ですか。

RCカワサキ 湘南台店

支店長 井田 博文

私の場合、大学生の時に過ごした時間には、何物にも代えがたいものでした。キャンパスでの時間もそうですが、それと同じくらい一歩出た街での出来事も大切な想い出です。湘南台でのいろいろな出来事を胸に刻み込んで過ごしてください。そして時には思い出して訪ねてください。

有限会社イワサキ

岩崎 盟三

地域との共生と街の活性化に向けて地元商店街の活用、それには単なる研究や勉強の場では無く、現場での積極的な行動と併せ内容によっては地域・行政等と一緒に事業に参画する事が必要。必ず将来役立つ事があると思います。

ASA(朝日新聞サービスアンカー)湘南台

岩崎 伸男

昔、遺伝子の中で、よくわからない意味不明瞭な遺伝子の事を「ジャンク」と呼んでいたそうです。このジャンクが突然変異を起こしその繰り返しが進化を生んでいるそうです。我々ASAもSFCの進化の為の「ジャンク」でありたいと思っています。

株式会社丸庄

藤崎 研二

当たり前の話ですが、湘南台はSFCができる前からある街です。しかし、みなさんが思っている以上に若い町であるのも確かです。これからますます発展する湘南台のまちづくりに、学生のみなさんの力を期待します。若いパワー溢れる若い町、湘南台を第二のキャンパスにしてください。

レストラン アローム

店長 森山 和夫

当店では洋食弁当の配達および各種パーティーを承っております。学生にとって毎日の学問は大切ですが、それを支える毎日の食事も大切です。お得な学生専用メニューをご用意しておりますので、ぜひみなさんにご利用ください。

「インベーダーからDNAへ。

夢中になれること、それが研究テーマだ。」

富
田
勝

環境情報学部教授兼政策・メディア研究科委員

Dr. INNOVATOR

中央 大学 大学

表紙アイデア 佐藤雅彦

■略歴

とみた まさる 1957年生まれ。

環境情報学部教授

兼政策・メディア研究科委員

1981年慶應義塾大学工学部数理工学科卒業。

1983年カーネギーメロン大学コンピュータ

科学部修士課程修了。

1985年同大学博士課程修了。

学位：Ph. D.（情報科学）、工学博士、医学博士。

専門分野：生命情報科学、遺伝子情報処理、分子生物学、自然言語処理、自動翻訳、人工知能

『学生時代にインベーダーゲームに夢中になり、それがきっかけでコンピュータの研究を始めた。そのコンピュータ研究が発展し、今では幅広くゲノム研究をしている。』

特集

第1部

SFC REVIEW 座談会 Date Wed, 29 Nov 2000

AUD・REVIEW 6年を振り返る —AUDから環境デザインへ—

大江： 本日の座談会では、今回のカリキュラム改訂で学部に「環境デザイン(ED) クラスター」ができ、また大学院の「AUDプログラム」も、今までより幅を広げて「環境デザインプログラム」へと展開していくこうという方向性が出てることを踏まえて、これから的是立のあり方をみなさんと話し合っていきたいと思います。まず、日端先生ら、AUDの設立の経緯についてお話いただけますでしょうか。

日端： 慶應義塾大学は日本で最初に設立された総合大学にも関わらず建築という領

しては、ちゃんと建築家として活躍していくための条件作りをしたいということでした。ちょっとSFCで建築をかじったというだけでは責任ある教育プログラムとはいえません。非常に限られたスタッフでかなり苦しかったのですが、平成6年から始まって6年間、小さなたまりから、だんだん大きくしていくこうとやってきたというわけですね。

塙越： 最初は他の学校と同じ建築教育をやっても仕方ないし、どうしようかということになって、都市と建築を含むいわゆる環境教

うに進めたことは1つの成果だと僕は思いますが、その技法教育を普通の建築学科と同じように進めたのでは、SFCらしい教育といふのにならないと思います。そこにどういう特色を持たせるのか、塙越先生がおっしゃった、横に広がっていくということもある程度見据えた技法教育が必要だと思うのですが、この点に関して三宅先生はどういうお考えをお持ちですか。

三宅： まず今回のカリキュラム改正の着眼点をいくつ整理してあげてみましょう。第1点



域が全くなく、それを作り出すという目的がありました。森泰吉郎さんからいただいた基金で建築・都市計画領域のプログラムをつくるという構想を、伊藤滋先生を中心にして推進されました。伊藤先生ご自身もSFCに最初に赴任されて、建築デザインの研究会をもたらし、デザインに対する学生の非常に強い関心を感じ取ったことで、このプログラムの実現により一層の力を入れられたのだと思います。建築設計や建設業は現在供給能力過剰の業界分野なのですけれども、建築や都市計画という仕事、あるいはそれに通ずるデザインという仕事、これはもう永久にある仕事で、そこにSFCが持つポテンシャルの中から他に全く新しい形のものができるのではないかということで進められてきたと思います。このAUDプログラムをあえて一級建築士の科目群という構成にしたのは、足場としては通常の建築教育を経験していくなくても、可能性と

育をEnvironmental Designという形でやっていくのがいいのではないかという話は、そのときからありました。今度のカリキュラム改革は、大学院の授業を学部生が一部取れるようにして、大学院と学部の一体化を図ることが最初の目標だったのです。特に、技法教育をやるには修士課程2年間はものすごく短い。だから学部からデザインを教えていくようなプログラムを作て、4年生の間に大学院レベルの話を少し消化しておけば、修士課程での専門教育が充実できると思いました。でもこの段階では、狭い意味での環境デザインであって、地球環境、社会開発、国際地域開発などの分野を全部インテグレートした大きいものし、それに対する名称が必要なんじゃないかなと思っています。

大江： 今回大学院を充実するために建築・都市に関する基礎教育を学部の中で行うよ

として、学部から大学院に連続するスタジオ制を基本とした教育体系、スクール・オブ・デザインの形態をとっていることです。それから第2点としては、マルチディシプリンアリーであること。ランドスケープ、建築、都市計画という基本領域に加えて、例はIT技術、経済、エコロジーといった多分野が共同してスタジオや講義を運営するということですね。第3としては、みずから問題を見出し、その課題にあわせて手法を開発していくことのできるのオープンシステムの教育体系であること。例えば、環境工学的な技術開発を促すとか、あるいはNPO的な組織をつくりだしていくとか、新しい仕組みづくりを内在していること。さらに第4点として国際的なネットワーク。海外のパートナーと共同授業やワークショップを運営する。その少なくとも4点があります。若干補足すると、ここでいうスタジオ制は、いわゆる伝統的な教育のように下から全部積

み上げで最後まで行くというのではなく、途中で入りのできるフレキシブルな方式を考えています。初級のスタジオは技法習得にありますですが、これはSFC教育が前提とする3つの言語概念のうち、デザイン言語の習得にあたり、デザイン・リテラシーを押さえつつ一定のプロフェッショナルな世界を見やることになります。逆に、上級のスタジオは多領域にまたがって、問題発見型かつ統合型の作業を行うところになるんですね。いわゆる一般的な工学部の建築学科のような専門内で完結するカテゴリックな教育はしません。オープンシステムの発想をそこで延ばしていきたいと考えています。

大江： 環境とは、ものすごく広い対象で、そこを具体的にどう組み立てて行くかというところがポイントになると思うのですが、石川先

といったそこに関わる色々な人が見えてきます。先ほどオープンと申し上げたのは、環境デザインに関わる様々な領域の人をむしろスタジオに巻き込んで、お互いにディスカッションしながら考へていこうということもある。それから、多領域の先生方に入っていただき、よりオープンという形になると思います。

大江： スタジオ制というのが少しイメージできないのですが、SFCの持っている授業と研究会とスタジオ制というのはどういうふうに関係してくるのですか。

三宅： 関係するところとまったく異なるところ両方ありますね。スタジオとは、わかりやすく言えば、問題を現場で咀嚼してみずから解決を生み出していくための場所であり、問題発見から方法の選択、手法開発まですべて

オオタカの住む自然に地域医療施設を作りたいという要望があります。そのためには、オオタカの住む自然を客観的に解析する方法を学び、それから地域医療とは何なのか、そこに求められるスペース、空間、あるいはコミュニティとの関係はどうなるかということを専門の方に教えていただく。これらの自然環境や生態学や病院という違った領域のものをきちんと1つの教育フレームの中に置いて、システムマティックに教えるべきものはきちんと教える。それによって研究会は本来の研究会に戻したいというわけです。現状では1つの研究会で基礎的な教育とクリエイティブなことと両方やらなければならなくて大変なのですが、このスタジオ制を導入することによって、段階的に教えるべきことは教えていき、研究会は研究会として非常にクリエイティブなことをやっていく。非常にすっきりとした、良い



環境情報学部教授
兼政策・メディア研究科委員
石川 幹子



政策・メディア研究科教授
兼環境情報学部教授
日端 康雄



政策・メディア研究科教授
三宅 理一



政策・メディア研究科教授
兼環境情報学部教授
塙越 功

生ご自身はランドスケープというお立場ですが、この点をどのようにお考えでしょうか。

石川： たしかに環境というのは、非常に広がりがあって、捕えどころがないわけですが、やはり一番身の回りの環境というのが、誰にでも捕まえやすいですね。最初に身の回りの空間ということで、1個の建築とかその回りの空間から始まって、アーバンデザインというスケール、それから都市スケールというふうにスタジオを構成していく、とりあえず力ばかりする領域に関しては基本的なものはきちんと勉強してもらいます。それから、このキャンパス自体の目標が、問題発見とその解決ということですので、対象地の絞込みをなるべく厳密に行って、現実に即してやる。そうすると、例えばデザイナー、プランナー、市民、行政と

がインテグレートされた場所を複数の教員が共同で恒常に運営することに意味があります。例えば「住宅」というテーマでスタジオを運営すると、まず住宅というものは何かということを歴史的かつ社会的に勉強し、それから住宅のタイプは何か、住まい方はどうあるべきか、必要な技術は何か、周囲の環境との関係はどうか、住宅政策の課題はどこにあるかという具合に、様々なことを思考しながら、最終的に計画と設計にまとめていくわけです。設計演習なんですね。

石川： ただその演習の進行状況に合わせて、適宜、講義も演習のなかで補足しながらいきます。ですから、完璧な演習ではなくて、両方をセットにしたものです。例えば新たに開設される看護医療学部を例にとりますと、まず

形になると私は思います。

大江： スタジオに相当する科目があるのでですか。

塙越： それが、「環境デザイン」や「応用環境デザイン」などの演習科目です。今までの大学院だけでやった量のだいたい3倍くらいになると思います。

大江： そのスタジオ制というのが、環境デザインクラスターとプログラムのひとつの特色であるということですが、私も含めてこのプログラムやクラスターの周辺にいて関わっている金安先生や片岡先生から見た時に、そういう教育システムが、もうちょっと社会科学的なものまで含めて展開しうるものなのか、やっぱり旧来のスタジオ制みたいにフィジカル

ルなどろにしか収束しないものなのか、そのへんのところはどうなのでしょうか。

金安： 例えば何かを作るといったとき、人間や社会がそういう諸々のことに関わっていくとき、どうやって作るか。“ことづくり”と言つたらいいのかな。“ものづくり”と“ことづくり”をセットにしたような形で、我々にとってどういうふうにものを作つたらいいのかということをモチーフにして、AUDのプロバーの方もつくることに参画する。それから社会科学や、ひょっとしたら文学畠の人も参画したら、同じ作ることでも色々な形のものが出てくるかもしれませんよね。そういう観点から少し見直す余地を入れておくことも必要かなという気がします。僕はジオグラフィという分野にいますから、ジオグラフィ・プランニング・プラクティスという形で計画につながっていく

で存在している。そういう文脈の中で存在する紛争とはどういうものか、どう解決してゆけばいいかを扱ってきたのは社会科学です。住民も、NPOも、企業も全部含んだソーシャルな存在としてのまちを作つていくときに、社会科学者は一体どういうかたちでスタジオなりAUDなりに貢献していくのかということを、今後考えていかなくてはならないと思っています。この分野で総合政策学部の先生方と環境情報学部の先生方は、お互い共通の物を持っているのに、SFCではお互いに閉じた空間の中でコミュニケーションされていて、なかなかつながる場がなかったけれども、今回のカリキュラム改革はお互いがどのように貢献しあつていいかということについて考えていくには良い機会だったと考えています。

大江： 私も金安先生や片岡先生のおしゃ

う方向に十分に展開していかないのです。ですから、例えば環境共生住宅をつくるという演習を行うスタジオだったら、そういう行為を取り巻く社会的文脈を考えるプロセスを入れなければいけないと思います。

日端： 片岡さんや大江さんがおっしゃったようなことも、私はスタジオ制で今度はうまくビルトインできそうな気がしています。具体的な問題に、自分が手を動かしたり足を動かしたりすることから入つて、やっぱり自分のしていることは世の中ではできないし、自分が世の中とどういうふうに関わっていくかということを学生自身が自覚して関心を持っていくというふうにしなくてはだめだと思います。実はSFCはそれを望んでいますが、実態としてはやっぱり従来型の講義はたくさんあるし、研究会はもう各先生方の自由にやってください



総合政策学部教授
兼政策・メディア研究科委員
大江 守之



環境情報学部教授
兼政策・メディア研究科委員
金安 岩男



総合政策学部助教授
片岡 正昭

のですが、諸々の要素をどういうふうに、地域の形成なり、空間形成という形で実現していくかということに関心があるのです。

片岡： 私は社会のダイナミックスである政治学という領域を扱っています。つまり、都市に住む人々にはそれぞれ利害があり、そして価値観の違いがある。そういうものの中で政策ができていくプロセスに関心を持っています。その側から見ると、建築物は、単に物としてあるだけではなくて、同時に社会的存在でもある。たとえば、横浜のピンクマンション事件では、設計者は富士山の夕焼けの赤い色のつもりで設計したけれど、近隣住民はピンクの不快な色のマンションだということで社会的紛争になったのです。建築物は物として存在するだけではなくて、社会的文脈の中

ることを非常に痛感しています。建築あるいは都市デザイン、あるいはランドスケープデザインにおける、絵を描けるスキルをつけさせなければならないというの、単に手が動くということではなくて、頭で考えて手が動くようにしなくてはいけないということだと思います。先日、世田谷区の人と区の新しいビジョンに関して議論をしたのですが、例えば、環境共生という点に関して、世田谷区は都営住宅の建て替えに際して、環境共生住宅をつくり、ビオトープをつくったり、屋上緑化したりと、いろいろな試みをして有名な事例になっています。それは素晴らしいことですが、そのあとがないのです。他でも都営住宅の建て替えを行つていますが、財政的に余裕がないので普通の建て替えですし、世田谷区全体として環境共生の住まい方をどうするのとい

いというふうになっている。スタジオ制はそこに一石を投げる可能性があると思います。ただこの教育はすごく大変で、まず先生方のチームワークが合わなくちゃいけない。学生の関心がたまたま建築のデザインばかりに行ってしまうと、もう少しソフトなことに引っ張り込みたいと思う先生方は出番が無くなるとか、そういう危険性も非常にあるわけです。だからその進めかたが非常に難しいのだけれども、うまくいくとSFCが一番期待している教育プログラムになると思いますよ。

〈第1部完〉

座談会は、14ページ第2部へ続きます。

AUD-REVIEWについて

高橋潤二郎 常任理事・環境情報学部教授兼政策・メディア研究科委員



——高橋先生、今日はAUDが大学院のプログラムとして発足してから5年近くたちますが、はじめに、高橋先生から見たAUDとその外部評価についてお聞きしたいと思います。

AUDプログラムは、伊藤先生はじめスタッフの協力で素晴らしい成果をあげてきたと思います。特に、都心サテライトで最先端の授業を展開したことは、大学としてはじめての試みであり、これを成功させた功績は絶大だと考えています。只、私自身は、urbanという概念が21世紀においてもリーディング・コンセプトになるかについてはいささか疑問に思っています。従来とは頭を切り替えた、新しい生活の仕方、新しい生活の場、そういうものを発想していくべきだと思います。だからAUDという言葉を捨てる覚悟が必要だと思います。ハビタートとしての地球、そこにおける生物としての人間の生き方を、付け加えるべきであると、私は思います。

そういうところに、既存の建築学科との違いを求める。学生のうちだからこそ新しい発想ができるのだからという観点から、時々社会に対して発表させたり、従来思っても見なかつたことをやってみたら、非常に面白い。

——なるほど。それでは、AUDの今後を、SFCの将来を含めてお願いします。

そうですね、AUDは既存の建築学や都市工学に比べたら、基礎的な技術が身についていない、それから全体の歴史がわかっていない

いなどの言い方はされます。もちろん、SFCのAUDという研究グループは、東大や東工大や早稲田の建築学科などの非常に膨大な歴史伝統があるものに比べれば、明らかにマイナーな存在であります。だから、その方面で勝負しようとしたら、相手は100年近くの歴史があるのだから、絶対勝てない。そうではないところで差別化をしていかなければならない。

——それはなんでしょうか？

それは、Designという概念を越えて、プランニングなりガバナンスなり、新しい概念を作ることです。それからもう1つは、Urbanだけでなく、ruralを含んだ総合的な生活空間をつくりだしてゆくことが必要だと思います。それと同時に、SFCが得意な「情報」ということを徹底的に考え、それをインフラとする新しい生活のあり方を考え抜いていくということなんじゃないでしょうか？また、僕はUrbanplanningなどの問題のうちの8割方、実は、コミュニケーションの問題ではないかと思っています。だから、そういうことも配慮できるようになれば、非常によいと思います。生活空間の改善にかかる諸問題へのソリューションに関する個別具体的なノウハウが、AUDから生まれてきたら、非常に面白い。まさに都市プロデューサーの育成ですよ。

——そこで生まれる卒業生とはどういうものでしょうか？

そうですね、今は理論と実践の間に、中間がないから、AUDの卒業生も進学や就職に困惑しているかもしれませんね。だから今私が申し上げたことは、実践なんだけども、同時に実践の中で作られた「経験則」のようなものがあり、かつ一般論も含んでいる。そういう類のものをAUDが、たくさんできあがってくると、僕はSFCの卒業生は、また違った存在になっていくと思います。

——最後にAUDを動物に例えるとなんだとおもいますか？

うーん（笑）、昔ビル・ゲイツが慶應義塾大学にきて、鳥居塾長と対談したときのことを例えにすると、AUDはチンパンジー、他大学の建築学科は象だと思います。チンパンジーは、フットワークの軽さと小人数ということで、勝負をしていく。そこにアイディアの新鮮さ、そして先取りした考え方ということでやっていけば、象のようにどっしり構えて動かない他大学にも負けないと思いますよ。

——今日はお忙しい中大変有難うございました。

インタビュー

政策・メディア研究科修士1年 小川 幸
環境情報学部2年 松田龍太郎



プロフィール

高橋 潤二郎 (たかはし じゅんじろう)

常任理事・環境情報学部教授兼政策・メディア研究科委員

慶應義塾大学経済学部 1958

同 大学院経済学研究科修士課程 1960

同 博士課程 1963

経済学修士

SFC構想、設立の中心メンバー。

専門の経済地理学だけではなく、メディア論、マーケティング論の第1人者として活躍。

「政策」と「正義」

総合政策学部長 鵜野 公郎



現状に満足せず改善しようと思って行動すればそれが政策である。状態をより良くしよう、と思った途端に、「誰にとつて」という問い合わせに直面することになる。誰の状態を改善しようとするのか。この問い合わせに答えようとすれば直ちに、わたくしのためなのか、家族や友人のためなのか、社会のためなのか、自分の国なのか世界全体なのか、今のためなのか将来世代のためなのか、考えなければならなくなる。「正義」とは何か、という問い合わせである。

「正義」という言葉を聞くことは今やほとんどない。今や死語なのかもしれない。かつて正義の名のもとに個人を踏み台にしたファシズムやコミュニズムなど全体主義的な時代があったからかもしれない。個人の価値観を出発点として（社会正義を振りかざさなくとも）競争的な市場が社会的な最適を達成すると考える新古典派的理論が主流であることによるのかも知れない。

われわれの社会は今や明治の頃のお手本であったアメリカの1.5倍、イギリスの2倍の1人当たり所得を手にしている。キャッチアップは果たしたのである。知的能力にかけてはトップレベルの諸君が、「わたくし」個人の状態を良くしよう、収入が高いことがその尺度だ、と考えることに止まって良いものであろうか。

世の中には政治や経済がカバーしきれていない分野が沢山ある。これまで長い間、大企業は規模の利益を実現するため望ましいものとされてきたことは事実であるが、利益のある部分は政府によって制度的に保護されたレンツシーキングの結果であり、ある部分は独占的な市場影響力や過去のブランドイメージの結果であるとの見方が今や世界的に主流である。Nine to Fiveのルーチンの仕事は機械化や海外移転で完全に過去のものとなった。企業にとつて平均賃金と個人の能力のミスマッチが利潤のもとである。変動激しい社会では

特定企業に特有な経験は他では役立たない。終身雇用は人質になるのと同じ、といわれるのはそのためである。1回限りの創造的な仕事にわれわれの社会はシフトする途しかない。そのための専門性が求められている。能力に見合った収入はここでも得られないであろうが、しかし、新しい社会を創造することができよう。慶應の「痩せ我慢の精神」はここから発しているのである。

コンピュータ、情報通信、金融、流通など全ての分野で、大企業がパノペータであった時代は過去のものとなり、ネットワーク型の柔軟な組織への転換が急速に進行中である。Economy of ScaleではなくEconomies of Scopeが重要となり、資本市場へのアクセスが容易となり、グローバル化の下での分業が進んだからである。諸君ならば未来を担うイノベーションを生みだすベンチャー企業を起こすこともできようし、研究プロジェクト・メンバーとして知的生産を担うこともできよう。産官学の枠を超えて国境をこえたNGOの役割は今後大きく拡大するであろうが、そこに活動の場を見出すことも期待される。市場機構からも政治機構からも無視されてきた環境を正面の政策課題とし持続可能な社会を実現することができよう。世界には大きな所得格差が存在する。それは生存の問題であり人権の問題であるが、国境を越えた政策は未だ全く不十分である。諸君の知的能力は、グローバル・コミュニケーションのるべき姿を見通すことができるであろう。

21世紀を迎えた日本社会は政治的にも社会的にも混迷の中にありミッション観を喪失したままである。自分のキャリアは自分の責任でつくる時代がきた。「わたくし」をこえたグローバルなレベルでの歴史観と正義感をもって現代のチャレンジに応えて欲しい。

——プロフィール
鵜野公郎 (うの きみお)
 総合政策学部長・教授
 兼政策・メディア研究科教授
 1941年生まれ
 慶應義塾大学経済学部卒
 専攻(専門分野)：政策分析、環境科学など
 担当科目：総合政策学他

[特集]

表紙の顔	1
SFC REVIEW座談会	富田 勝
AUD・REVIEW 6年を振り返る —AUDから環境デザインへ—	第1部 2~4 第2部 14~15
インタビュー	
AUD・REVIEWについて	高橋潤二郎 5
研究室紹介	8
助手紹介	16

[連載]

SFC注目! 「政策」と「正義」	6
鵜野公郎	
SFC新人類 —「SPAプロジェクト」	宇都宮クララ 18
—「新しいフランス研究家」	堀 茂樹 20
シリーズ政策提言③ 21世紀、日本外交のあり方	22
草野 厚	
新半学半教 稲蔭正彦研究室 一次世代デジタルエンターテイメントを創造するシンクタンクを目指して—	26
学習環境研究会 —21世紀をなう子供達の学習環境の改善を新しい学習環境を考えるネットワーク作りを—	28
SFC知の格闘 学部長対談：総合政策学部VS環境情報学部	30
鵜野公郎、斎藤信男	
時の話題 SFC第三の言語登場～デザイン言語の全て～	36
後藤 武	
ゲストスピーカーズ	38
紺野美沙子	
SFC遠望 SFCの皆さんへ	42
山本捷雄	
上げよ勝ち闘 —国際インターンシップ “AIESEC 慶應湘南藤沢委員会”	44
—“SFC イヤーブック委員会”	45
メディア評 「『ケータイ・ネット人間』の精神分析」/「知の欺瞞」	46
温故知新 我ディジタル人生	48
相磯秀夫	
ミネルバの梟たち —卒業生トップツ的対談	52
土井英司、村田崇治、渡邊宏美	
トピックSFC・SFC便り	56
トピック湘南・SFC便り	57
福澤先生SFCを斬る 第3回 SFC流語学ことはじめ	58

塚越研究室



政策・メディア研究科教授
兼環境情報学部教授

塚越 功

施設環境のあり方を追求することが研究テーマであり、これまでに、北海道奥尻島の地震・津波による被害と復興の調査、阪神・淡路大震災の復興状況調査などを実施してきたが、現在は、コミュニティー防災組織の問題、近隣商業と災害対策の問題、火災時の避難の問題、津波発生時の避難行動の問題、モバイル仮設住宅の問題などに取り組んでいる。これらの研究は、主に藤沢市を題材として実施しており、ときには、藤沢市の都市計画・防災担当部局の方々、キャンパス周辺のコミュニティー防災組織の方々と共に、災害に対抗するための方策を検討する研究会を開催するなどの活動を行っている。

研究の成果は、日本建築学会、日本都市計画学会、地域安全学会などで発表しているが、毎年アジアの各地で開催されるアジア大都市研究セミナーにも積極的に参加し、研究発表を行っている。

(文責・塚越功)

大学院プロジェクト「都市空間のリスクマネジメント」を中心として実施している研究室でi205を拠点としている。教員メンバーは、塚越功教授、梶秀樹教授、石橋助手が中心となり、プロジェクトには伊藤滋(客員教授)、石川幹子教授、金安岩男教授、福井弘道教授に協力をいただいている。

災害対策を通して都市空間を構成する社会組織・



●1999年 台湾地震

三宅研究室



政策・メディア研究科教授

三宅 理一

本研究室の特徴は、都市や建築に対する歴史的な視点と今日の課題とを結びつけ、地域や市街地の計画にあたって新たな方法論を作り上げていくところにある。我国の木造住宅密集地域や開発途上国の中市街地などを対象として、問題を整理し、住民や行政の意思決定システムを含めた地域のゆるやかな発展のためのプログラムづくりを行う。また、地域デザインや技術の発掘と再評価を通して新たな計画手法を練り、支援技術とシステムを打ち立てる。

さらには、世界各地とネットワークをつくり、環境や歴史遺産の保護と活用のための組織づくりを行う。

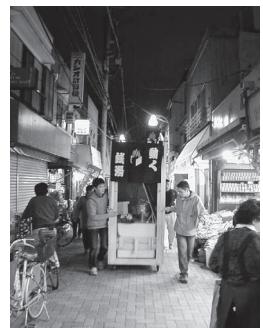
研究活動は、ネットワークづくりを主としたグローバルな地域研究とシステム構築を目的とした手法研究とに分かれている。地域研究としては、東北アジア地域、ロシア・東欧地域、北欧・西欧地域、紅海沿岸地域を対象に、行政や国際機関と協力しながら、歴史都市の計画、建築遺産の継承、持続的発展のための計画と技術開発等を手がける。「朝鮮通信使の道」(日本、韓国)計画、瀋陽市(中国)やカザン市(ロシア連邦)の調査計画、プロボタ修道院(ルーマニア)の保存修復計画、ゴンダール市(エチオピア)のマスタートーブランづくり等が現在進行中である。

手法研究は、木造住宅密集地域の再開発、歩行者空間の整備、アートプログラムを利用した地域活性化の仕組みづくり、木質環境の維持管理システムの構築などをテーマに、デジタル情報を用いた歩行者運動観測システムや町並み建て替え調整システム等を立ち上げて活用している。以上のように、本研究室の研究は多領域にわたり、各大学や研究機関との結びつきも密接である。また、学生諸君も積極的に現場に出て、問題を身体で受け止めることが基本となっている。

(文責・三宅理一)

特集 AUDから
環境デザインへ

研究室紹介



●2000年11月に開催された
「アーティスト・イン・空家」の模様

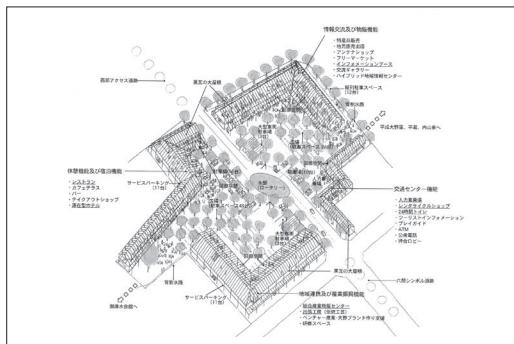
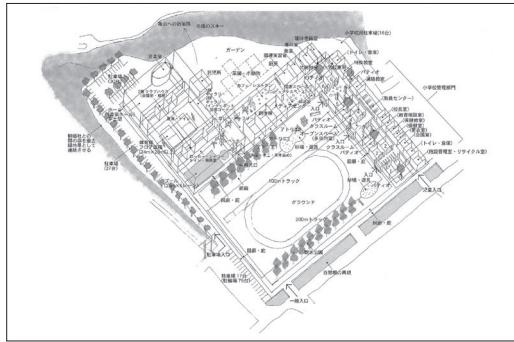
政策・メディア研究科チーフアシップ教授
葉 祥栄

葉研究室は、葉祥栄先生が経済学部のご出身で、また海外にて建築教育を受けられた事から、学部時代の専攻が建築以外にも国際関係・言語学・遺伝子工学等と多彩であり、また社会人経験者も在籍する、さまざまなバックグラウンドをもつ個性的な人々の集まりである。

日本における建築教育の場では、「いかにして建てるか」を考え、そのための知識を身につけ、図面表現などの訓練をしていくというのが一般的だが、研究室のメンバーは必ずしも建築行為自体を前提とせず、それぞれの問題意識をユニークな視点や手法を用いて追究している。

研究室では、用意された「答え」に学生達が従うという旧来の指導は一切行われない。葉先生はメンバーの主張に真剣に耳を傾け、奇想天外な発想さえも頭ごなしに否定せずにご意見を述べて下さるのである。ダメな事ははっきり「ダメ」と言われるが、少しでも面白い点があればニコニコしながら「ほう、それはいいね」と讃めてもらえるので、大変励みになる。

AUDが目標とするのは「新しいタイプの建築家・都市計画家の育成」だが、その教育プログラムは現時点ではまだ実験段階であり、今後改善を重ねて発展してゆくべきものである。葉研究室は、「建築家」「都市計画家」という枠さえも飛び越える柔軟性を備え、分野横断的な活動を通じて建築の可能性をあらゆる面で拡大していく様な人材を育てる事で、AUDの理念実現に大いに貢献し得るのではないだろうか。(文責・修士2年 横井浩司)



建築

池田研究室

環境情報学部助教授
池田 靖史

池田研究室では、建築家でもある池田靖史・助教授が、建築と都市空間について横断的にとらえた実際の設計活動に取り組んでいる。そのなかでも、特に情報技術の空間構成要素としての働きに我々は注目している。このような研究テーマは、従来型の建築学科では扱いづらい境界領域にあたり、文・理を問わず、幅広い分野の人材が集まるAUDプログラムだからこそ扱えるテーマだと見えるだろう。大学院進学以前、私は理系の建築学科に所属していたため、同じ専門分野の学生の間でのコミュニケーションが日常的だったのに対して、現在の環境は互いに異なる視点を持つ学生で構成されており、プロジェクト活動に共に取り組む中で、時には先生、学生の立場を超えた活発な意見交換や新しい発見など多くの刺激を受けていることを実感した。このような合意形成のプロセスは、より現実の建設、都市開発プロジェクトが進められる環境に近いといえる。今後建築や都市デザインの現場において、様々な専門の人々と意見を交えながら仕事に取り組みたい。

池田研究室の主な研究成果

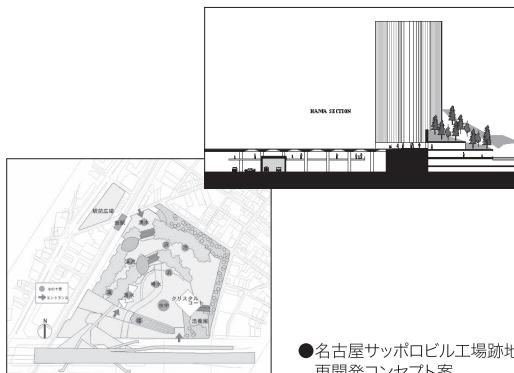
「情報化空間の建築デザイン」

(<http://gaudi.sfc.keio.ac.jp/orf99/index.html>)

「名古屋サッポロビル工場跡地 再開発コンセプト提案」

(<http://gaudi.sfc.keio.ac.jp/orf2000/index.html>) [2001/1公開予定]] <http://gaudi.sfc.keio.ac.jp/orf2000index.html>

(文責・修士2年 諸戸達)

●名古屋サッポロビル工場跡地
再開発コンセプト案

日端研究室



政策・メディア研究科教授
兼環境情報学部教授

日端 康雄

日端研究室は都市工学出身の先生の指導のもと、都市計画やまちづくりの問題に工学的な立場から取り組んでいる。

これまで都市マスター・プラン論、土地利用計画、地区計画、都市計画システム、都市再開発マネージメント論、環境デザインといった研究領域を扱ってきた。最近の研究テーマは容積率移転、都心居住問題、キャンパスプラン、都市計画制度改正問題、都市計画ビジョンなどである。

ここ5年間継続的に取り組んでいる研究として、サイバーマスター・プランニングプロジェクトがある。これはサイバースペースを介在させたマスター・プランへの参加や合意形成、情報公開のあり方を扱ったものであり、私自身もこのプロジェクトに参加して研究を進めている。

学生の出身（修士）は、SFCの学部のほか、三田の経済学部、文学部や他大学の法学部、工学部など多岐にわたる。また、私のように社会人を数年経験してから入学してくる者も多く、様々なバックグラウンドを持つ者どうしが、お互いに刺激し合える環境にある。

研究の指導は、先生の忙しいスケジュールの合間に縫って週1回行われる。先生は学会理事や国の審議会委員、東京都の審議会会長などをされ、かなり多忙な日々を送られているが、こうした現場における経験や知識に裏打ちされた指導こそが、我々の求めているものである。

研究会では、学生の率直な疑問に対して的確で丁寧な解答が返され、学生にとって得難い貴重な時間となっている。

（文責・修士2年 福島賢二）

石川研究室



環境情報学部教授
兼政策・メディア研究科委員

石川 幹子

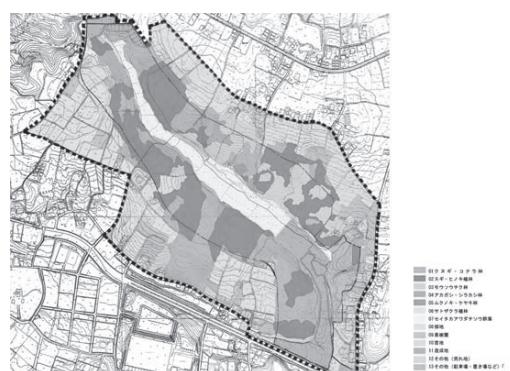
石川研究室では、人間と自然との関わり合いに主眼に置いた都市環境や景観に関する研究を行っています。他大学と異なり理系・文系の壁がなく学際的にスタディできるのがSFCの大きな魅力の1つですが、我が研究会も例に漏れず様々な背景を持つ学生が集っています。各人の研究は、都心の再開発と新しい環境システムの提案、東京ベイエリアの自然の回復、GIS等を用いた都市近郊の環境の研究、各務原市緑の基本計画にリンクした研究所の井上康平氏、デザインはアメリカのランドスケープ・アーキテクトのブライアン・ベーカー氏など、第一線で活躍される方にご指導頂いています。そして、石川先生はどのような活動を行なう際にも、大抵厳しく時には優しく私達学生を指導して下さいます。問題の山積に戸惑う私達の足元をさりげなく照らす先生のアドバイスには、いつも感嘆の念を禁じ得ません。

（文責・修士1年 片桐由希子）

●大和市公式HP「どこでもコミュニティ」より転載

特集 | AUDから
環境デザインへ

研究室紹介



●埼玉県入間郡三芳町 Enviro Media



総合政策学部教授
兼政策・メディア研究科委員

梶 秀樹

当研究室では、日本および途上国を対象に、人間居住環境の整備と保全の立場から見た開発政策のあり方について研究している。開発の場合は、テーマによって、近隣社会であったり、都市や地域であったり、さらには国土全体を対象とする。また、居住環境は、施設の整備による利便性の向上や、自然災害に対する安全性の確保といった物的なものに限らず、貧困の一部としての居住環境改善の視点から、人間開発の計測も扱う。

SFCで教鞭をとるようになってまだ2年しか経っていないため、大学院生もおらず、研究会を中心とした研究室の活動の形は必ずしも固まっていない。初年度は、4人の研究会メンバーだけで、毎回オフィスでコーヒーを飲みながら研究会を続けた。しかし、昨年は3年生10人、4年生6人となったため、3年生についてはやむを得ず教室でやったが、やはり、距離ができ突っ込んだ議論が難しいという焦燥感をぬぐえなかった。そこで、来年度は複数研究会と、共同研究室で大学院も学部も合同でやることを考えている。

年2回の飲み会と夏のゼミ合宿は定例となつたが、さらに春の進級・卒業祝い合宿も定例化したいと考えている。

(文責・梶秀樹)

都市・ ランドスケープ



総合政策学部教授
兼政策・メディア研究科委員

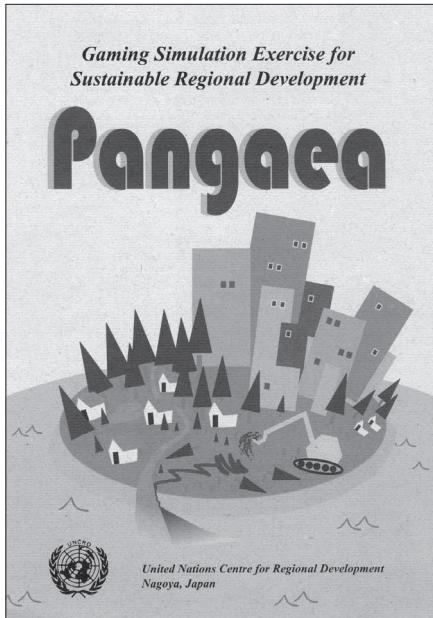
大江 守之

都心居住

大江研究室は、→人口学的・地理学的・社会学的な切り口から建築・都市空間にアプローチする。都市や住空間に現れる社会現象やライフスタイルといった抽象的なものを、様々なデータや手法によって分析し、具体化していくのである。学生たちは、今年度の研究室の大きなテーマである「都心居住」などのものと、それぞれの興味に基づいて個別に研究を進めている。その研究内容は高齢者のグループリビングや単身者のライフスタイル、白金台の商店街研究など幅広く、学生それぞれのカラーが色濃く表れている。大江先生はこれらの多様なテーマをまとめ、時には学生たちと議論をかわしながらアドバイスをくださる存在である。毎週のミーティングではほのぼのとした雰囲気のなか自由に意見を交換し合い、手法を切り拓きながらの研究に行き詰まったときでも誰かの一言から解決の糸口が見つかることもしばしばである。

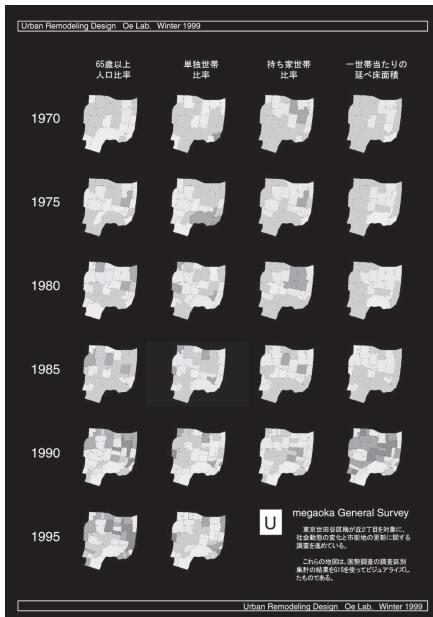
そんな大江研究会を説明する重要なキーワードは"巡査"だろう。白金台や三軒茶屋などの地域を歩いて回り、その土地の雰囲気や地理的特性を足と肩で感じ取る。町並みを楽しみながら、歩く道で買いたい食いをしたり、気の向くままに電車に乗ってみたり、そんなところからもそこに住む人たちの生活が垣間見えておもしろい。そして巡査のあとはおいしいごはんとお酒、というのがお決まりのコースらしい。よく歩き、よく食べ、よく飲み、よくしゃべり、よく読み…。大江研究会はみんな人生の楽しみ方をよく知っている。

(文責・修士1年 小川幸)



●「Pangaea」パンフレット表紙

大江研究室



●世田谷区梅ヶ丘の人口変遷

片岡研究室



総合政策学部助教授
片岡 正昭

片岡研究室は、「まちづくりと政策プロセス」プロジェクト所属の大学院生と「地方政府の政策イノベーション」研究会所属の学部学生からなる。構成員が追求する研究分野は、情報公開・福祉のまちづくり・外国籍市民との共生など多様である。この多様性をひとつに結び合わせるのが、研究室が掲げる共通テーマと片岡先生のパーソナリティーである。共通テーマとは、地方発の政策イノベーションが生まれ、全国に広がるメカニズムの解明である。メンバー一人一人の研究が、研究室が提起する理論を支える事例研究となる。パーソナリティーとは、実証性重視の研究姿勢と地方自治研究に対する「愛情」とでも言うべきもので、学生の研究には例外なく一時には瑣末に思えるような発見でも一意義を見出し、共通テーマの中に、しかるべき位置付けを与えてくれる点である。

企業や自治体でまちづくりに携わった経験をもつ学生・院生が含まれる点も、この研究室の特徴である。実務経験者の参加は、研究室でのディスカッションに具体性と奥行きを与え、研究室での議論が再び実務にフィードバックされていく。また、学部生と院生の交流も盛んで、院生が学部研究会の討論者を務める一方、学部生による修士・博士研究の批判的検討に、院生がたじたじとなる場面もある。学部・院生を問わず、地方自治の未解明な分野に自分なりの発見を付け加えようという活気が、この研究室の特徴だといえよう。

(文責・元SFC博士課程終了 現群馬大学社会情報学部講師 伊藤修一郎)



●片岡研究会

駒井研究室



総合政策学部教授
兼政策・メディア研究科委員
駒井 正晶

駒井研究室の"町づくり政策プロセス"プロジェクトは、八木研究室、片岡研究室、金安研究室との共同プロジェクトで、経済、地方条例、地方政治、地理学とそれそれ違う専門を持つ教授と学生が議論するインターイディシブリナリーなものである。駒井先生の専門は経済で、住宅を中心とした不動産の経済分析を自身の研究テーマとしている。

不動産は土地とその上物である建物を指し、環境デザイン、土地デザインのコンポーネントである。また、不動産は建築・都市計画や住環境とも深い関わりを持つが、研究視点がフィジカルな建築にくらべてその視点は経済的である。たとえば、過去の学生による研究には、公園の経済的価値や街の迷惑建築の経済的不価値を分析し、その価値が価格にどうあらわれるかを研究したものがあった。また、居住水準に市場がどう影響するかを市場研究し、それを政策研究につなげている。

まだ構想段階だが、共に資産を表すファイナンス(金融)と不動産、これらはマ

ーケットによってより近くなり、その関係はますます深くなっていくであろう。11月30日からは不動産投資信託が始まり、建築というフィジカルな形と金融が同じ1つのテーブルに乗ることになった。最近は金融と不動産の両方に関心を持つ人々も増えてきたが、都市や土地の開発には金融は不可欠な要素であるし、これからもそのニーズはでてくるであろう。

(文責・駒井正晶)

特集 AUDから
環境デザインへ

研究室紹介

金安研究室



環境情報学部教授
兼政策・メディア研究科委員
金安 岩男

ポジショニングの計画実践
変化しつづける情報化社会の中では、いかにして自分自身の位置付け(ポジショニング)をわかるかが問われている。金安研究会では、「都市・地域に関する研究」ならびに「発想に関する計画実践」を通して自分自身の考えを模索、構築、展開し、ポジショニングを学ぶことをテーマとしている。

春学期には都市と土地に関する経済学、都市計画、地域分析などの基礎を学び、発想の基礎を理解し応用する力を身につける。さらに秋学期は実際のプロジェクトなどを対象にして、より実践的なアプローチにつなげていく。基礎理論の学習、フィールドワーク、フィールドトリップ、地方自治体の協力、各種手法習得、データ解析、報告書作成、プレゼンテーション、ウェブの作成、オーシャリングツール利用による作品の作成などを通してプロジェクトプランニングに必要な能力を身につけることをねらいとしている。研究は個人研究および共同研究プロジェクトの二本立てで、プロジェクトプランニング、



総合政策学部教授
兼政策・メディア研究科委員

八木 欣之介

八木研究会において、国や地方公共団体等で公共的な政策の立案・実施等にかかる人材の育成のため、憲法・行政法等の基礎的知識の習得を図るとともに、分権化社会における地方自治の確立を目指して、地域のまちづくり条例の立案の研究等を行っている。

現代において、経済のグローバル化やIT革命の進展により、社会は大きな変動の波に直面している。中央政府や地方自治体の行政においても、このような変化に対応し、新しい行政システムの構築と国民の多様なニーズに合致する政策の立案が求められている。なかでも、地方分権が推進され、地域の個性ある発展が期待される今日、住民に身近な自治体が、憲法により保障された条例制定権を活用することにより、環境問題や福祉政策、教育文化の振興、地域の生活や産業の発展等に役立たせる可能性は大きいものと思われる。

そこで、この研究会では、これまで、それぞれの所属学生のふるさとや現に居住している市町村を対象として、住民にとって真に豊かで住みよいまちづくりを実現するため、具体的な条件案の立案と提言等を行ってきた。昨年の例を挙げれば、「差別撤廃を目指す条例」、「自然環境と生活環境を守る条例」、「外国人市民代表者会議条例」、「喫煙行為の適正化に関する条例」等々の立案と提言を行ったところである。

まちづくり・ 政策

地方振興、ならびに地場産業などを学習し、また、リスクの認知とコミュニケーションを学び、組織運営のあり方も考えていく。1つのものを完成させる一連のプロセスを通じて「生きる力」を身につけ、今後の学習ならびに人生に活かしてくれることを期待している。(文責・金安岩男)



●原題: 知的のキャンパスのプランニング
韓国語書名: 日本の大学改革

今後も、法律学・行政学等の基礎的理論を現実行政の場に結びつけることを目標として、よりよい地域づくりのため施策の立案の研究等を行っていきたいものと考える。

(文責・八木欣之介)



●八木研究会



総合政策学部助教授
福井 弘道

都市/環境問題への空間情報科学(SIS)からのアプローチ 当研究室では、空間情報科学(Spatial Information Science)という共通の視点から、各自興味対象を設定して、グローバルなヒートアイランド現象からメソスケールにおける精密農業や環境考古学への応用、更によりミクロな地域居住環境評価問題まで、多種多様な都市/環境問題へとアプローチしている。ゼミ演習では、空間情報科学の基本ツールとして、GIS(地理情報システム)やリモートセンシングによる空間情報データのハンドリング及び解析の手法、空間相互作用モデルの構築等について学び、ゼミ講義では、最新の研究動向やアプローチ手法のレクチャー及び活発な議論を行う。各自(グループも含)研究課題については、基本的に自主的に進めるが、研究室で取り組んでいるプロジェクトや企業との共同研究と密接なコラボレーションを行っているため、机上の学問ではなく、まさに現実問題としてのフィールドを対象に、社会のニーズに応えながら実現性をもって進めなければならない。この点が、当

研究室の特徴であり、私たち学生は、学問としての新規性と同時に、即社会への適用及び還元が求められる。

このような環境の中で、福井先生御自身は、先頭に立って、学内外で大変勢力的に研究活動を展開されており、学生は、行き詰まっている時には、先生御自身の大変有用な経験則やご指導を頂きながら、先生に負けないよう追いかけながら活動をしている(笑)。ここでは、先生を含め、テーマは多彩だが同じ視点からアプローチをしている者が集まって、空間情報科学の視点をより深め、その限界と共に頭を悩ませつつ、自由にその応用分野を拡大している。(文責・修士2年 坂田愛)



●福井研究会公式HPより転載

特集
第2部

SFC REVIEW 座談会 Date Wed, 29 Nov 2000

AUD・REVIEW 6年を振り返る

—AUDから環境デザインへ—

塙越： 先ほど片岡先生と金安先生のお話で少し気づいたのだけど、従来の建築はただ物だけ作っていたわけじゃなくて、建築工学科じゃなく建築科だから、半分は人間のことを扱い、人間の集団としての社会を追いかけて、結局は都市計画というのは建築が作ってきたみたいなところもある。それでは、これから我々がどういうふうにやってくかというと、まさにおっしゃる通りで、社会的な面にむしろ目を向けた形のデザインをやっていかなくてはいけないと思う。実は慶應義塾ではビルディングの部分とアーキテクチャーの部分を分けてしまって、理工学部のほうでビルディングのほうをやって、SFCでは建築空間、あるいは建築に伴う人間の活動をやる、という話になってしまっている。僕はそこも一体的にやるべきだと思うのだけど、この教育システムを議論するとやっぱりそっちに重点を置いた教育システムをやっていくべきでしょうね。



石川： 最近本当に環境デザインの領域はどんどん変わってきていて、特に緑の分野というのは市民レベルで、逆に行政が作れない計画を草の根で掘り起こしてきて、行政がその後追いをしている、というのが今の状態だと思います。先ほど看護医療学部の話をいたしましたけれども、藤沢市のずっとやっていた方にお話を伺ったり、もうすでにそういう形でオープンにどんどんしてますので、逆にもう少し政策の合意形成とか、そういう授業うまくリンクできれば、私どもが手探りでやって

いるような部分が、パワーアップするんじやないかという気が致します。そしてそれをサポートするデジタルの技法をひとつの媒介としてきちんと教育に使えば、今申し上げたハードの面で、それから政策参画がしっかりリンクしてくるというふうに私は思っております。

三宅： 僕も全く同感ですね。例えば、物を動かす、ことを動かすというときに、必ず意思決定の仕組みそのものに関わらなければ動かない。先ほど大江先生が言われたように環境共生住宅がその先続かないというのは、例えばその決定システムの部分が施設計画と

活かしたスタジオ運営というのがあると思います。

片岡： 来年から"地域社会と自治"という1年生向けの地方自治の入門科目をつくることになったのですが、私はそこでとにかくまず街に出て、自分で問題発見をするということを重視するつもりです。地域社会にどういう問題があるかという事を、今まで観念的ないしは直感的に知っていたものを、具体的なデータや観察による裏付けできちんと把握して、自分たちなりの解決策を立てるにはどうしたらいいのか1年生のうちから総合的に考えて

いく。そういうトレーニングは、地方自治だけではなくて、建築や環境あるいは都市計画といった様々な分野の基礎として、非常に重要な訓練となるのではないかと思います。



齧歯をきたしているというように考えてもかまわないわけです。スタジオの中でまずはその実態を知らなければなりませんが、むしろ一歩突っ込んで意思決定の仕組みを動かす方法にまで到るべきだと思います。実際に色々な現場に出ると、行政の人は縦割りでしか動かないからダメだと、それからプランナーにはビジョンがないとか、建築家は自己主張しかしないとか、見れば見るほどダメさ加減というのがわかってくるもので、そのこと自体が大きな問題として発見されなければならない。それをスタジオの中でみずから学び、それを乗り越える仕組みを提案するところまでいけば始めたものです。幸いSFCの環境というのは、「もの」と「こと」の意思決定に関する様々な知見に関わる方が非常に多くありますので、むしろそういうスタッフを積極的に

大江： SFCというのは、授業の中である種のスタジオ制をやってきたと思うのです。ただ、授業というのは、1人の教員が全部をやろうとするわけで、教員相互に入りあうことはなかったわけです。だけど、元々建築や都市計画の演習というのは、教員が共同で運営してきて相互に入りこむし、それから最後の講評会ではみんなであれこれ言うわけですね。今後そういうこともスタジオ制というコンセプトで、授業にもスタジオ的な発想というのを入れていくこともあります。

金安： 僕が習ってきた環境の定義は「何かを取り囲むものすべて」となっているのです。だから自然環境だけじゃなくて、技術的な環境や、社会環境や、いろんな環境があって、コンピュータネットワークも1つの環境だし、SFCは開設時からそれをものすごくアピールしてきたよね。それからデザインに関しても、設計するという意味のデザインもあれば、計画をするとか、考え方とか、概念だというよう

な意味合いでも使っています。ですから、僕はこの環境デザインっていう言葉の中身を、「環境」も「デザイン」もそうやって広く使うと、SFCが11年間やってきたことが生きるのではないかかなと思います。その方が、ふくらみもあって面白い展開になるのではないかなという気がしています。

三宅：付け加えると、インターナショナルな意味で今回は大きく動かしていくことがあります。日本国内で閉じるのではなくて、海外の大学とか研究機関、あるいは国際機関と協力して、研究と教育の双方を積極的にやっていくつもりです。外国の教員がSFCでの授業に加わるという話もプログラムの1つとしてできつつありますし、それから我々が外国に行ったりして、グローバルな問題を肌で感じることを目指しています。それも難民とか地震といった災害の現場を含めて。

石川：私はやっぱりたくましいフロンティアが似合う学生であって欲しいと思うのです。2年からスタジオ制が始まっている大学院に入る頃には地球のど

こに行つても1人で問題発見、問題解決できるたくましい人間を育てたいと思っています。

日端：金安先生がおっしゃった広い意味の環境デザインというのは、このSFCの重要なコンセプトの1つなの

ですよ。でも、建築・都市・ランドスケープをコアにした狭い意味での環境デザインと、広い意味での環境デザインを安易に絡ませるというのは、下手をすると拡散してしまう危険性があるので、そなならないようにうまく持っていくやり方をこれから考えなくてはいけませんね。

塙越：今は1人1人が模索している時代だと思います。19世紀後半から20世紀にかけての建築をリードするような思想が破綻して、

21世紀これからどうなるのかというときに、みんな個人レベルでの意見はあるのだけど、統一した運動みたいにはなってない。僕は当分、そういうのを決めないほうが良いと思う。みんなが思い思いに色々なことを言ったほうが、学生に対する影響が大きい。もちろん学生を迷わせることにもなるのだけど、そんな中から学生が育ってきて、そしたら本物ができると思う。我々の世代だけではダメだと思っています。

三宅：僕はヨーロッパの学校にいたのですが、設計の講評会では必ず教員同士の喧嘩が始まるんですよ。そっちの方が面白いですね。

石川：前の大学で、初めてランドスケープと建築と一緒にやったのですが、なかなか合意がとれなくて、建築の先生と私と、学生がいるのに議論が始まったんですよ。バンバン言い合ってしまい、後で、はたと気が付いてやめたのですけども、もう学生が今までで1番面白かったと言っていました。



金安：事実そうですよね。そういうプロセスの中から、何が違うのかとか、どういう価値基準を持っているからそこが正しいとか、譲れないとか、見えてきますよね。そうすると学問の扱ってたつところがすごく浮き彫りにされる可能性がある。

片岡：同じ地方自治を扱っていても、同じ総合政策の八木先生と私では考え方がかなり違っていて、大学院の学生の見ている前で大論争が始まるとのですから、もっと色々な分

野から入ってきたらもっと面白い議論になってくると思います。まず自分の専門の枠を破らないことにはどうにもならないということでしょうか。

大江：今日こうしていろいろ議論できたのは非常に有意義だったと思います。これから我々はこのプログラムやクラスターを実施に移していくなかで、お話しがあったような精神をうまく実現していくということを考えていければと思います。

プロフィール

石川幹子(いしかわ みきこ)
環境情報学部教授兼政策・メディア研究科委員
1948年生まれ
東京大学農学部卒
専攻(専門分野): ランドスケープ・デザイン、環境計画
担当科目: 環境デザイン論、景観設計論II他

大江守之(おおえ もりゆき)
総合政策学部教授兼政策・メディア研究科委員
1951年生まれ
東京大学理学部卒
専攻(専門分野): 人口・家族変動論、都市・住宅政策
担当科目: ポビュレーションダイナミックス、社会動態論他

片岡正昭(かたおか まさあき)
総合政策学部助教授
1954年生まれ
早稲田大学政治経済学部卒
専攻(専門分野): 地方政府論、データサイエンス
担当科目: データ分析、地方政府論I・II他

金安岩男(かなやす いわお)
環境情報学部教授兼政策・メディア研究科委員
1947年生まれ
慶應義塾大学経済学部卒
専攻(専門分野): 地理学、地域計画、環境情報社会論
担当科目: 空間と行動、フローデザイン論他

塙越 功(つかごし いさお)
政策・メディア研究科教授兼環境情報学部教授
1939年生まれ
東京大学工学部卒
専攻(専門分野): 建築学・都市防災・建築火災
担当科目: 都市と環境II・生活環境創造論他

日端康雄(ひばた やすお)
政策・メディア研究科教授兼環境情報学部教授
1943年生まれ
東京大学工学部卒
専攻(専門分野): 都市工学、土地利用計画論、都市計画システム
担当科目: 概念構築(環境)B、大学院総合講座他

三宅理一(みやけりいち)
政策・メディア研究科教授
1948年生まれ
東京大学工学部卒
専攻(専門分野): 建築史、地域計画、デザイン理論、歴史的建造物の保存修復
担当科目: 都市と環境II、環境の変遷他



政策・メディア研究科
専任講師
渡邊 朗子

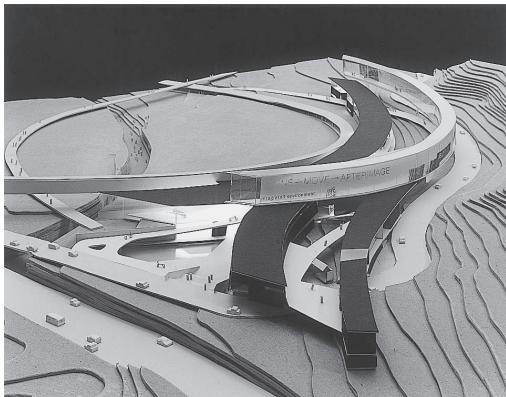
情報を媒体にした人の活動の調査研究をもとにデザイン理論を組み立て、その理論をもとに空間・建築設計から家具、情報環境まで、生活に関わる幅広い領域でデザイン活動を実践している。

昨年、高橋理事、奥出教授の指導のもと、

大学院卒業後、鹿島建設設計部での実務経験を経て、原寸から都市計画まで広範な建築スケールに携わった経験を活かすため、大学という環境を選択した。

環境情報学部助手
関谷 浩史

を誘発するような空間のデザイン手法を開発・実践していくたく、現在三宅研究室に所属し、墨田区京島を対象とした、コミュニティが形成される場の特性に関する研究をし、かつ実践・発表の場として設計競技にも積極的に応募し、実績をあげている。

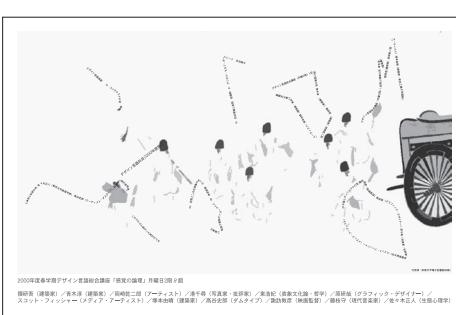


●青森県三内丸山遺跡・青森美術館コンペ案



環境情報学部助手
後藤 武

リナリーとしてデザインを再領域化することを目的として、「デザイン言語」科目を湘南藤沢キャンパスに開設し、そのマネージメントを行う。また三宅研究室との共同作業として「アーティスト・イン・空家プロジェクト」にも携わっている。」



A grayscale architectural rendering of a modern urban complex. The central feature is a large, rectangular building with a flat roof and a prominent entrance. This is surrounded by several smaller, cubic structures of varying heights. The entire complex is situated on a hillside, with dense foliage and trees visible at the base and along the slopes.

●群馬県中里村プロポーザル



総合政策学部助手
石橋 健一

AUD（建築都市デザイン）プログラムという名前からは、建築設計や都市デザインといったハードなイメージが先行しがちですが、その一方で、都市整備計画評価・国土整備計画評価といった政策評価に関する研究も行なわれている。私の研究関心は後者に含まれ、具体的には、都市を含む開発政策評価やその在り方にある。これまで行なってきた研究は大きく2つに分類することができる。都心商業地の再開発計画評価方法の開発と、途上国の開発

計画支援システムの開発である。前者は、都市の中心商業地における再開発計画を消費者行動の視点から評価するモデルに関する研究であり、後者は、ゲーミングシミュレーションにより仮想国家における開発計画の立案を行ない、そのシミュレーション結果を用いて計画の事前・事後評価を行なう研究である。これらの研究は、都心商業地というマイクロなものから国家というマクロなものまでを対象として、開発計画の評価を行ない開発政策はどうあるべきかという事について知見を得るものだ。今後も計画評価に関する研究を進め、AUDプログラムの一助となれば幸甚である。



政策・メディア研究科助手
森本 淳子

「健康の森」における生物多様性

来春、看護医学部が開設される「健康の森」では、放棄水田跡地にセイタカアワダチソウ群落（図1）や、クズ群落に深く覆われた水路（図2）がみられ、生物多様性的低下が懸念される。しかし、谷戸の指標的存在であるオオタカや（図3）ホトケドジョウが確認されるなど（図4）、いまだに貴重な二次的自然が残存している。この「健康の森」をフィールドとして、人と自然の共生のあり方について具体的な提案をしていきたい。

図1：放棄水田跡地に優占するセイタカアワダチソウ群落
図2：谷戸周辺部の水路を覆うクズ群落
図3：絶滅危惧種オオタカの巣
図4：谷戸の冷涼な流水はホトケドジョウの住処となる



図1



図3



図4

「Enviromedia」 タジマ奨励賞受賞

メンバー 平本督太郎、加曾利千草、田中真美子、三上哲也、三島由樹

成果報告 今回、私たちは日本建築学会の2000年度建築学会設計競技に自分たちの作品を応募した。この設計競技は、「新世紀の田園居住」を提案するというので、私たちは「Enviromedia」という新たな概念をコンセプトに、埼玉県入間郡三芳町における田園居住を提案したのである。その結果、関東支部で入選を果たし、全国審査でタジマ奨励賞という名誉ある賞をいただくことが出来た。



特集をつくり終えて

一味も二味も違ったものへと 発展していくことを期待

大学院政策・メディア研究科に設置されたAUDプログラムは、学部の専攻にかかわらず建築や都市計画を学ぼうとする学生に対し専門教育を行い、規定の科目を履修することにより1級建築士受験資格が得られるというプログラムであり、2001年度からスタートする大学院への各種プログラムの導入に際してモデルケースの役割を果たしたと言える。今後AUDはランドスケープ・デザインも含んだ「環境デザイン・プログラム」へと移行するが、同時に幅広い専門領域を持つ本大学院の特色を活かして、関連領域との連携を再構築していくことが求められる。AUDが既存の建築・都市教育プログラムとは一味も二味も違ったものへと発展していくことを期待したい。

総合政策学部教授 大江 守之

編集後記

SFC REVIEW第9号ができあがりました。学生中心の制作も第3回目、ようやく軌道に乗り、初めて編集幹事は実質的には編集業務に携わらずに、後方からじっと見ているだけですんだという記念の号です。学生が写真撮影をし、インタビューを行い、テープ起こしをし、記事を書き、レイアウトを工夫し、校正をしました。頻繁に交わされる編集委員たち（すべて学生です。）のメールを読んでいると、彼らが短期間に成長していくさまが印象的でした。インタビューを申し込む書簡の書き方1つとっても、原案を出す者、改善案を提示する複数の者がいて次第に社会で通用する頼み方が身に付いていきました。原稿の頼み方、催促の仕方についても然りです。SFC REVIEWが雑誌制作のみならずマナー教育の場としてもすばらしい道場となつたことを嬉しく思います。ご多忙の中、誠実に学生に対応し、時には行き過ぎをいさめるメールを書いてくださるなど、格別の配慮をしてくださった教職員のみなさまにはこの道場は機能しなかつたでしょう。僭越ながら、編集幹事として御礼申し上げます。また、企画から完成に至るすべての段階にわり、いつも変わらぬ賢明さと優しさで制作に携わってくださった田坂真美さんに学生ともども厚く御礼申し上げたいと思います。ありがとうございました。

編集幹事 青木節子

STAFF

■ 編集幹事	青木 節子
■ 特集幹事	大江 守之
■ 編集委員長 副委員長	牧 兼充 松田龍太郎
■ 編集委員	大西 知子 熊澤 一晃 藤谷 一郎 岡 千尋 倉重 雅一 増田 祐希 加藤 祐矢 斎藤 麗 南 智佳子 喜多紗也佳 中込まり子 山澤美由起 北本かおり 原 孝幸
■ 特集担当	小川 幸
■ 写真協力	SFC イヤーブック委員会
■ 事務局	田坂 真美

本誌で紹介したい人物やことがらを教えてください。編集委員も募集します。
詳しくは、湘南藤沢学会 (gakkai@sfc.keio.ac.jp) まで。

KEIO SFC REVIEW No.9 2001年4月1日発行

発行人 斎藤 信男

発行所 慶應義塾大学 湘南藤沢学会

〒252-0816 神奈川県藤沢市遠藤5322

TEL. 0466-49-3437 FAX. 0466-49-3594

<http://gakkai.sfc.keio.ac.jp/>

E-mail:gakkai@sfc.keio.ac.jp

制作・印刷 株式会社 ワキプリントピア

〒252-0815 神奈川県藤沢市石川1137番地

TEL. 0466-87-5811 FAX. 0466-88-6560

<http://www.printpia.co.jp/>

表紙アイデア 佐藤 雅彦（環境情報学部 教授）

無断転載・複製を禁じます。ご相談は慶應義塾大学 湘南藤沢学会までお寄せください。

SFC REVIEWのバックナンバー



No.1

特集
デジタルユニバーシティから
デジタル社会へ

定価 1,500円
(消費税込)



No.2

特集
グローバル・コモンズ

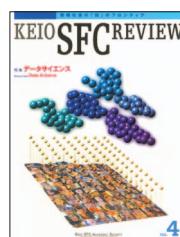
定価 1,500円
(消費税込)



No.3

特集
メディア・コミュニケーション

定価 1,500円
(消費税込)



No.4

特集
データサイエンス

定価 1,500円
(消費税込)



No.5

特集
多言語主義の可能性

定価 1,500円
(消費税込)



No.6

特集
慶應義塾大学SFC
—これまでの10年、これからの100年

定価 1,500円
(消費税込)



No.7

特集
SFC Version2.0
—SFCは、次の段階に入りました。—

定価 300円
(消費税込)



No.8

特集
ポリシースクール
総合政策学部とは何か？

定価 300円
(消費税込)

バックナンバー、年間購読をご希望の方は、

TEL. 0466-49-3437 FAX. 0466-49-3594

E-mail:gakkai@sfc.keio.ac.jpまで

お申し込み下さい。

※年間購読は、年4回(1月、4月、7月、10月)発行予定で年間200円の割引きが
あります。手数料(送料込)を含め、合計1,800円となっております。

<http://www.review.sfc.keio.ac.jp/>

SFC REVIEWで扱われた内容の一部を、紙面には掲載できないメディア(音声・映像ほか)を用いて
紹介しております。雑誌にはない様々な企画も掲載する予定です。

Keio SFC Academic Society
慶應義塾大学湘南藤沢学会